

二〇一七年度

沖縄大学 一般入試（前期）

「国語」

・法経学部 法経学科

・人文学部 国際コミュニケーション学科

福祉文化学科

こども文化学科

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】 つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私に親しいある老科学者がある日私に次のようなことを語って聞かせた。

「科学者になるには『あたま』がよくなくてはいけない」これは普通世人の口にする一つの命題である。これはある意味ではほんとうだと思われる。【A】、一方でまた「科学者はあたまが悪くなくてはいけない」という命題も、ある意味ではやはりほんとうである。そうしてこの後のほうの命題は、それを指摘し解説する人が①ひか^く的に少数である。

この一見相反する二つの命題は実は一つのものの互いに②たいり^つし共存する二つの半面を表現するものである。この見かけ上のパラドックスは、実は「あたま」という言葉の内容に関する③てい^ぎの曖昧不鮮明から生まれることはもちろんである。

論理の④れん^さのただ一つの輪をも取り失わないように、また混乱の中に部分と全体との関係を見失わないようにするためには、正確でかつ⑤緻密な頭脳を要する。紛糾した可能性の⑥岐路に立ったときに、取るべき道を誤らないためには前途を見透す内察と直観の力を持たなければならぬ。すなわちこの意味ではたしかに科学者は「あたま」がよくなくてはならないのである。

しかしまた、普通にいわゆる常識的にわかりきったと思われることで、そうして、普通の意味でいわゆるあたまの悪い人にも容易にわかったと思われるような尋常茶飯事の中に、何かしら不可解な疑点を認めそうしてその⑦せん^{めい}に苦吟することが、単なる科学教育者にはとにかく、科学的研究に従事する者にはさらにいっそう重要⑦必須なことである。この点で科学者は、普通の頭の悪い人よりも、もつともつと物わかりの悪いのみ込みの悪い田舎者であり朴念仁(注1)でなければならぬ。

【B】頭のいい人は、言わば足の早い旅人のようなものである。人より先に人のまだ行かない所へ行き着くこともできる代わりに、途中の道ばたあるいはちよつとしたわき道にある肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人足ののろい人がずつとあとからおくられて来てわけもなくそのだいいな宝物を拾って行く場合がある。

頭のいい人は、言わば富士のすそ野まで来て、そこから頂上をながめただけで、それで富士の全体をのみ込んで東京へ引き返すという心配がある。富士はやはり登ってみなければわからない。

頭のいい人は見通しがきくだけに、あらゆる道筋の前途の難関が見渡される。少なくとも自分でそういう気がする。そのためにややもすると前進する勇気を阻喪しやすい。頭の悪い人は前途に霧がかかっているためにかえって楽観的である。そうして難関に出会っても存外どうにかしてそれを切り抜けて行く。どうにも抜けられない難関というのはきわめてまれだからである。

【C】、研学の徒はあまり頭のいい先生にうっかり助言を⑧請うてはいけない。きつと前途に重畳する難関を一つ一つしらみつぶしに枚挙されてそうして自分のせつかく楽しみにしている企図の絶望を宣告されるからである。⑨委細かまわず着手してみると存外指摘された難関は楽に始末がつ

いて、指摘されなかった意外な難点に出会うこともある。

頭のよい人は、あまりに多く頭の力を⑩かしんする恐れがある。その結果として、自然がわれわれに表示する現象が自分の頭で考えたことと一致しない場合に、「自然のほうの間違っている」かのようを考える恐れがある。まさかそれほどでなくても、そういったような傾向になる恐れがある。これでは自然科学は自然の科学でなくなる。一方でまた自分の思ったような結果が出たときに、それが実は思ったとは別の原因のために生じた⑪ぐうぜんの結果でありはしないかという可能性を吟味するといううまい仕事を忘れる恐れがある。

頭の悪い人は、頭のいい人が考えて、はじめからだめにきまつているような試みを、一生懸命につづけている。やっと、それがだめとわかるころには、しかしたいい何かしらだめでない他のものの糸口を取り上げている。そうしてそれは、そのはじめからだめな試みをあえてしなかった人には決して手に触れる機会のないような糸口である場合も少なくない。自然は書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人にもその神秘の扉を開いて見せるからである。

頭のいい人には恋ができない。恋は盲目である。科学者になるには自然を恋人としなければならぬ。自然は【D】その恋人にのみ真心を打ち明けるものである。

(1) 科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者(注2)の頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。

頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が⑫伴なうからである。けがを恐れる人は大工にはなれない。失敗をこわがる人は科学者にはなれない。科学もやはり頭の悪い命知らずの死骸しがいの山の上に築かれた殿堂であり、血の川のほとりに咲いた花園である。一身の利害に対して頭がよい人は戦士にはなりにくい。

頭のいい人には他人の仕事のあらが目につきやすい。その結果として自然に他人のする事が愚かに見え従って自分がだれよりも賢いというような錯覚に陥りやすい。そうなると自然の結果として自分の向上心にゆるみが出て、やがてその人の進歩が止まってしまふ。頭の悪い人には他人の仕事がたいていみんな立派に見えると同時にまたえらい人の仕事でも自分にもできそうな気がするのでおのずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。

頭のいい人で人の仕事のあらはわかるが自分の仕事のあらは見えないという程度の人がある。そういう人は人の仕事をくさしながらも自分で何かしら仕事をして、そうして学界にいくぶんの貢献をする。しかしもういつそう頭がよくて、自分の仕事のあらも見えないという人がある。そういう人になると、どこまで研究しても結末がつかない。それで結局研究の結果をまとめないで終わる。すなわち何もしなかったのと、実証的な⑬けんちからは同等になる。そういう人はなんでもわかっているが、ただ「人間は過誤の動物である」という事実だけを忘却しているのである。一方ではまた、大小方円の見さかいかもつかないほどに頭が悪いおかげで大胆な実験をし大胆な理論を公にしその結果として百の間違いの内に一つ二つの真を見つけ出して学界に何がしかの貢献をしまだ誤って大家の名を博する事さえある。しかし科学の世界ではすべての間違いは⑭泡沫のように消えて真なもののみが生き残る。それで何もしない人よりは何かした人のほうが科学に貢献するわけである。

頭のいい学者はまた、何か思いついた仕事があった場合にでも、その仕事の結果の価値という点から見るとせっかく骨を折っても結局たいした重要なものになりそうもないという見込みをつけて着手

しないで終わる場合が多い。しかし頭の悪い学者はそんな見込みが立たないために、人からはきわめてつまらないと思われる事でもなんでもがむしやらに仕事に取りついてわき目もふらずに進行して行く。そうしているうちに、初めには予期しなかったような重大な結果にぶつかる機会も決して少なくはない。この場合にも頭のいい人は人間の頭のを買いかぶって天然の無制限な興行きを忘却するのである。科学的研究の結果の価値はそれが現われるまではたいていだれにもわからない。【E】、結果が出た時にはだれも認めなかった価値が十年百年の後に初めて認められることも珍しくはない。頭がよくて、そうして、自分を頭がいいと思いい利口だと思う人は先生にはなれても科学者にはなれない。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚かな赤裸の自分を投げ出し、そうしてただ大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟があつて、初めて科学者にはなれるのである。しかしそれだけでは科学者にはなれない事ももちろんである。やはり観察と分析と推理の正確周到を必要とするのは言うまでもないことである。

つまり、(2) 頭が悪いと同時に頭がよくなくてはならないのである。

この事実に対する認識の不足が、科学の正常なる進歩を阻害する場合が【F】ある。これは科学にたずさわるほどの人々の慎重な省察を要することと思われる。

最後にもう一つ、頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としては立派な科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」(注3)の学であつて「致知」(注3)の一部に過ぎない。しかるに現在の科学の国土はまだウパニシャド(注4)や老子やソクラテスの世界との通路を一筋でももっていない。芭蕉や広重の世界にも手を出すがかりをもっていない。そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して、科学ばかりが学のように思い思いあがるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の人であるためには少なからざる障害となるであろう。これもわかりきったことのものであつてしばしば忘れがちなことであり、そうして忘れてならないことの一つであろうと思われる。

この老科学者の世迷い言を読んで不快に感ずる人はきつとうらやむべきすぐれた頭のいい学者であろう。またこれを読んで会心の笑みをもらす人は、またきつとうらやむべく頭の悪い立派な科学者であろう。これを読んで何事をも考えない人はおそらく科学の世界に縁のない科学教育者か科学商人の類であろうと思われる。

注1 朴念仁||言葉少なく不愛想な人。また、道理のわからない者。

注2 迂愚者||世間の事情にうとく愚かな人。

注3 格物致知||学問・修養法の一つ。朱子学では、自己とあらゆる事物に内在する個別の理を窮め(格物)、後天的に得た知見を拡充(致知)して究極的に宇宙普遍の理に達することを指す。

注4 ウパニシャド||古代インドの哲学的文献。

寺田寅彦「科学者とあたま(昭和八年十月、鉄塔)」「寺田寅彦随筆集 第四卷」小宮豊隆編
岩波書店より。ただし、一部改変した。

問一 傍線部①から⑭の漢字にはひらがなで読みをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

問二 【A】から【F】にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。

また それで しばしば しかし いわゆる やはり

問三 次の①～⑥にあげた特徴あるいは比喩は、本文中で表現されている、A「頭のいい人」、B「頭の悪い人」、それぞれどちらに当てはまりますか。記号AまたはBで答えなさい。

- ① 足の速い旅人
- ② 足ののろい人
- ③ 前途の難関に対し楽観的な人
- ④ 書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人
- ⑤ 自然のまん中へ赤裸で飛び込んでくる人
- ⑥ 批評家

問四 本文中に傍線部(1)「科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。」とあるが、実用的で即効的な応用科学ではなく、基礎科学の重要性が直接表現されている、連続する二つの文の最初と最後の八字を抜き出しなさい(句読点も字数に数える)。

問五 本文中に傍線部(2)「頭が悪いと同時に頭がよくなってはならないのである。」とあるが、それはどういうことですか。一〇〇字程度で説明しなさい。

問六 本文中の後半の枠で囲んだ段落(「最後にもう一つ、く一つであろうと思われる。」)で述べられていることを一〇〇字程度でわかりやすく説明しなさい。

問七 この文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。